

特集 「若手教員育成システム」を効果的に進めるために



「若手教員育成システム」は、教職2年目から4年目までの若手教員の資質能力の向上を目的に実施している本市独自のシステムで、今年度は74校146名の若手が対象です。

このシステムの特徴は、若手がそれぞれの勤務校での実務を通して学んでいく、いわゆるOJTの方式をとっていることです。そのため、各校で指名された「校内サポーター」の役割が重要です。

そこで今回の研修ニュースレターでは、昨年度「校内サポーター」を務めてくださった先生方へのアンケートの回答をもとに、「校内サポーター」の先生方が各学校で「若手教員育成システム」を効果的に進めていただくためのヒントを探ってみました。

・サポートをする上で、教えるというより一緒に考えるという立場を心がけました。

・できるだけ若手の良い点を見つけ、伝えるようにしました。

・若手が一人で悩むことのないよう、こちらから声をかけ、相談しやすい雰囲気を作るようにしました。

・時には苦言も。(言葉を選び、言い方にも気をつけましたが)

・自由な発想を阻害しないよう最低限度の助言をするようにしました。

・自分の経験の中で、うまくいったことだけでなく失敗した例なども伝えるようにしました。

・若手にアドバイスを受け入れる気持ちがないと、改善は期待できないことから、話しやすい雰囲気の醸成に努めました。

・できるだけ話や相談を聞くようにし、本人の気持ちをくんだ上で、アドバイスを行うようにしました。

・何気ない言葉かけや会話で同僚としてのつながりを絶やさないようにしました。

・主体的に行動できるように最小限の助言にとどめました。

・改善点が目についても、まずは若手の考え・方針を聞くよう心がけました。

・できる限り具体的なアドバイスをするよう心がけました。

関わり方・接し方

重点化

・教科指導についてはある程度力量があったので、生徒指導面を中心にアドバイスするようにしました。

・学年行事の指導に中心に関わらせ、指導の「流れ」を経験から学んでもらいました。

・学年での活動では、(若手に)積極的に役割を分担し、実践を重ねられるようにしました。

・初めて学級担任となったので、同一学年内での差が出ないように学年として支援しました。

・特に、配慮を要する生徒やその保護者への対応についての助言を心がけてきました。

・卒業学年であったので、卒業関係の仕事でも実践力を高められるようにしました。

授業

・授業公開の際には、他の先生方にも声をかけて、より多くの先生からの意見をもらえるようにしました。

・若手教員の意図を踏まえた上で、参観した授業がどう見えたか、さらに違う角度からの指導方法を提案するように心がけました。

・若手を指導するというより、自分自身の取り組みを振り返る気持ちで一緒に授業作りをしました。

・自分と若手との TT の授業を計画し、実践しました。

・板書を写真に撮っておいてもらい、それをもとに助言をしました。

・自分自身が、(若手のみならず)校内の教職員向けに授業公開を行いました。

コーディネーター

・様々な教科の先輩教員の授業を参観できるよう、すべての教員に協力を求めました。(小学校)

・自分の他に、教科の先輩教員に教科指導に関するサポーターとなってもらいサポートしてもらいました。(中学校)

・特別な配慮を要する児童への対応については、具体的な手立てを示すとともに、全校体制で支援できるようコーディネートしました。

・サポーターのみならず、複数の教員が協力し合ってサポートする取り組みを心がけました。

・児童の情報を伝達し合えるような風通しの良い環境の維持に努めました。

・児童指導面の相談の時には、児童指導主任にも一緒に入ってもらいました。

「若手教員育成システム」に関する御質問・御相談は、宇都宮市教育センターまでお気軽にどうぞ。

【宇都宮市教育センター 情報・研修グループ 研修担当 電話 639-4382】